

# GUNDAM MS HISTORICA

ガンダム  
MSヒストリカ

究極のガンダムオンリーマガジン、  
ここに創刊！

初代ガンダムを徹底特集

## 白の伝説 RX-78-2ガンダム

ガンダムの世紀 皆河有伽

第1回 そのとき、ガンダムが動いた

GUNDAM SIDESTREAM ガンダム・サイドストリーム

第1回 SD戦国伝・誕生編

GUNPLA Revelations ~ガンプラ30年の歩み~

第1回 ガンプラ誕生からHGシリーズへの進化





# 白の伝説

人類史上最大の惨劇<sup>さいぐつ</sup>となった一年戦争後半、地球連邦軍は、突然ともいえるタイミングで、白色に輝く新型モビルスーツを戦線に投入した。後の時代まで語り継がれることになる伝説の機体、RX 78 2ガンダムである。この規格外ともいえるMSについて、徹底的に解明する





# RX計画とV作戦

ジオン公国軍が秘密裏に開発に備えていたころ、地球連邦軍もひそかにMS開発計画を進めていた。ここでは、この計画の概略と経緯について解説する

## 人型機動兵器の黎明

年戦争が勃発するまでの宇宙空間での戦いは、人出力ヒームや長距離ミサイルの飛び交う距離を測いた艦艇と艦艇との間でいわれるのが一般的だった。戦力の優劣を決定するのは、艦艇の数と火力、そして発射の速さであった。

それは、一年戦争以前の地球連邦軍の陣容を見れば明らかだろう。連邦軍は、単なる示威目的で多数の艦艇を保有していたわけではない。そこには、れきとした根拠があったのである。

だが、ミノフスキー粒子の発見と、その軍事利用がなされるようになってから、状況は一変することになる。

高濃度で散布されたミノフスキー粒子は、宇宙空間でもすぐに散放することなく一定の幅を保持した領域を形成する。そしてその領域は、可視光より波長の長い電磁波を、ほぼ完全に遮断することが知られていた。

このミノフスキー粒子の作り出す電磁波障害領域を、効率的に解除する手段は見えていた。なかつた。それは半世紀以上経過してもかわらなかつた。ため、必然的に、宇宙空間での戦いは大きく様変わりすることになった。

まず、中長距離戦闘が事実上不可能になった。ミノフスキー粒子の障害下では、宙敵のレンジが大幅に縮小する。光センサーは有効だったが、可視光だけに情報収集では、数百キロ以上の距離をばさんだ監視戦はほとんど意味をなさないうものとなっていた。

必然的に、敵との距離は大きく接近することになった。それだけでなく、味方の艦艇も、通信手段の確保や相手の位置確認のために、こくく距離を短くするをえなくした。

この状況にいち早く目にしたのが、ジオン公国軍の技術開発陣であった。

この時期、地球連邦に対する機密言論でいたジオン公国は、連邦軍との決定的な戦力差を埋めるための方策を探っていた。

前述の通り、ミノフスキー粒子の影響下では、センサーの有効範囲が大幅に縮小する。小型の艦艇ならば、中距離に接近するまで見えない可能性が高かつた。艦艇の固有攻撃火力では連邦軍に及ばないものの、こうした見えない機体で1に接近したうえで攻撃を行えば(加えていえば、当時の艦艇は、近接戦闘を引掛ける敵に対しては無力だった)、少ない戦力で敵に有効なダメージを与えるのではないかと。ジオン側の



技術者たちは、こく考えたのである。

そこで発案されたのが、マニピュレーターと歩行や接地用の脚部を装備した個人用戦闘ボットなかつた。既存の宇宙作業機の技術を活用したこのアイデアは、すぐに現在のMSの形へと発展し、数年を経ずして、量産を目的とした最初の実用機がロールアウトすることになる。

ザクの名で知られる、今高1メートルの大型機動兵器、すなわちMSの誕生である。

## RX計画

ジオン公国軍がひそかにMSの開発計画を進めているなか、地球連邦軍はこの脅威ともいえる兵器の存在を察知していた。

連邦軍内でRX計画なるプロジェクトが発足したのは、それからほどなくしてのことである。この計画は、ジオン軍の新兵器に対する研究と対抗兵器の開発のためのものなかつたが、MSという兵器への警戒感の低さもあり、計画は遅々として進展しなかつた。

開発前夜、ジオンからの亡命研究者たちがプロジェクトチームに加わるまでの間に、この計画が壊したのは、陸軍の次期主力戦車の設計をも用いた対MS戦車RTX-44と、MSの基礎技術を開発するための機軸がいくつか、というところだといわれている。

しかし、ジオンからの研究者たちのもたらした情報は、チーム全体に薄く、浸透した雰囲気を変えさせることになつた。

RXシリーズの最初の成果であるRX-75ガン

タンク および他のボールの原型となるRX-76の試作1号機がロールアウトしたのはちょうどこの時期である。

さらにチームは研究を重ね、年戦争の開戦とほぼ同時期には、すでにMS開発に必要な基礎技術をほとんど網羅していたという。

開戦と同時に、地球連邦艦隊はMSザクによって、壊滅的ともいえる被害を受けることになるが、それもプロジェクトチームの人間にすれば、当然の結果にすぎなかつた。

艦隊司令部は、RX計画関係者からの報告で内告を受けながら、近接戦闘をしかけてくるであろうMSに対して、ほぼなんの対策も取らずとなつたからである。

この結果を受け、RX計画の技術者チームは、1気がいや増すのを感じずにはいられなかつたという。なぜなら、彼らの開発の成果が、連邦軍ひいては地球連邦全体の命運を直接左右するものとなるからである。

そんなあり、レール中將(当時)の号令で、RX計画はV作戦と改称され、連邦軍内で最優先





のプロジェクトへと格上げされることが決定した



V作戦を牽引して、  
、監督、オカから指導  
を蒙った高橋は、その  
影響力は大きかった。

## V作戦——1 MSの再定義とその理想形

後発である強みもあって、V作戦のプロジェクトチームは、MSという兵器の持つ可能性を非常によく研究していた

彼らが最初に行ったのは、MSという兵器の再定義であった。シオン公国軍は、MSを近接戦闘用機動兵器と位置づけていたが、地球連邦軍側はそれをさらに押し進めた名目で、この兵器体系そのものをとらえようとしていたのだ

まず、最初に見直されたのは、MSの運用法そのものだった

V作戦において、なによりも重視されたのは、MS同士の戦闘への対応だった。連邦軍MSで出撃するパイロットは、対MS戦闘をこなすことになるのか、は不明だったからである

また、MSは降戦兵器でもあることが内部で認められた。これは、単にMSが降上でも使用可能という意味ではなく、降下の戦闘でも主戦力たりうる、という意味である

人間同様に地形形成破壊の強い、脚歩行を行い、闊歩的といえ、スラスターによるシンプやホバリングが可能なMSは、平野の地形を攻略可能であり、対空戦闘や、MS以外の戦力が入り込めない地形に潜入での待ち伏せなど、従来の降戦兵器では不可能な運用が想定可能だった

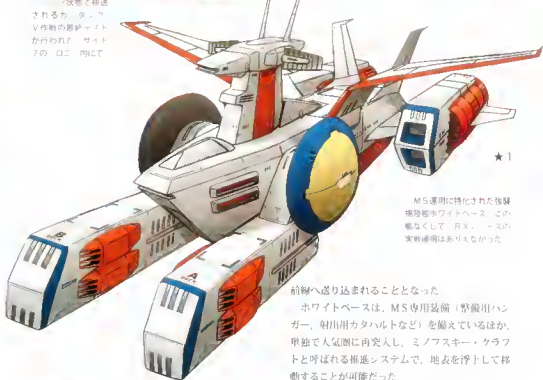
こうして見直しを進めていくと、MSは決して局地戦用の特殊な兵器ではないことがわかってきた。それどころか、他の兵器では不可能な数多くの戦術、たとえば、直接海岸道路から地表へと降下して、戦拠点を急襲するなど、を可能にする、1台兵器としての無面を持ちうるということが判明していったのである

ここにいて、プロジェクトの方向性は決定された。想定されるあらゆる状況で戦えるMS。現在実現可能な技術で、理想に近いMSを造り出す。果たして、この数ヶ月後、プロジェクトの成果は成功裏に形をとることになる。試作機 RX 78 2 ガンダムは、まさにこの設計思想を具現化した機体だった

V作戦軍師の一人、  
テム・レイ。連邦軍の開発  
は、こうした技術者たち  
によって支えられていた



「試験で確認  
されるか。チーム  
V作戦の最終テスト  
が行われ、サイト  
7の、ロニ、内にて



MS運用が特化した後継機  
降戦専用機ホワイトベース。この  
艦なくして、RX-78-2の  
実戦運用はありえなかった

## V作戦——2 量産機開発のために

もちろん、この一見珍奇なものを追いつけるような決定には、合理的な理由があった

これから開発される機体は、今後地球連邦軍で開発されるすべてのMSの礎となるからである。特に、この試作機に準じて、チームは主力MSの開発にはもかならなければならなかった

だが、戦局の転機を決するであろう主力機は、データがあまりにも不足していた。戦場で収集されたザクの解析結果を加えても、完全な決定を下すにはまだ十分ではなかった。である。それどころか、連邦軍にはほとんどなMSの運用データも存在しなかった

つまり、ガンダムは、連邦軍製MSのためのデータ収集機体だったのである。それも、できるだけ異なる環境を転戦しつつ、多くの運用データを集められるよう、タフで、敵の注目を集めるように非常によくつ、外見的にも、性能的にも、ものでなければならなかった

とはいえ、開発チームは決してガンダムを軽く扱っていたわけではない。無敵級ともいえる手厚とマンパワー、可能なかぎりのあらゆる先端技術投入することによって、（兵器に使用される技術は、極力トラブルを防ぐために、ある程度周

知されて時間の経過したものが必要になるのが常識である）この機体は、まぎれもなく「当り前」のMSとしてロールアウトすることになった

たか、プロジェクトはここから本番だった。完成したガンダムを始めとするRXシリーズは、ヘガサス級強襲降艦機ホワイトベースとともに、

前線へ送り込まれることとなった

ホワイトベースは、MS専用装備（野戦用ハンガー、射出力カタパルトなど）を備えているほか、単独で人型圏内再突入し、ミノフスキー・クラウドと呼ばれる推進システムで、地表を浮上して移動することが可能だった

これは、この艦がMSサポート用母艦として建造されたからにはほかならない。MSを戦域まで運ぶ、機動する役割を担っていたのだ。また、機体が完成したとはいえ、ガンダムはどこでトラブルが発生するか予測のつかない状態であった。このため、常時整備を行う必要があり、そのための設備を備えた艦の随伴は必須であった

加えて、母艦と連携したMSの運用データの収集を行う目的もあった。プロジェクトチームは、あらゆる機会を利用してデータの蓄積を行おうとしたのだ

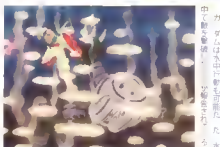
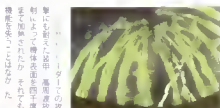


連邦軍の主力MSとして、  
ボールは比較的早い時期に完成されて  
たが、ムスは終戦前  
のサイト3まで製作が滞り  
、その完成が遅れた



## ガンダム開発の困難

実際の運用においてかなりの苦難をきわめたRX 78-2 ガンダムではあるが、その開発過程もまた



困難に満ちたものだった。

最大の問題は、開発期間の短かった「開発」の段階で、機体の素地となる機体試作はいくつかに限定されていたものの、その意図的すぎる設計思想ゆえ、まったくノウハウの存在しないことから、機体を構成していかなければならない現実から、当初開発陣は困惑することになった。

幸運だったのは、ガンダムに搭載される事が決定していた技術が、最先端とはいえ、それなりに研究が進み、比較的安定した実装が可能だったことであつた。

特に、装甲・構造材に採用されたルナ・チタニウム合金の存在は、むしろこのMSの開発を手助けするものとなった。強靱かつ軽量、耐熱・耐放射線性能に優れたこの合金は、従来の素材なら耐えられない地用やすやすと耐え、基礎研究段階で予想された障害をほとんど経験することなく、開発期間の大幅な短縮に大いに寄与することになった。

加えて、このMSが全体をブロック構造で分割していたことも大きかった。これは主にメンテ

ンスを重視し、もたれた「開発を」に準じて進めることが可能だったため、人員の技術者を投入した大規模な開発が可能となったのだ。

とはいえ、機体のブロック構造化は、機体構造の複雑化を招き、また各ブロックの機能的精度のばらつき、機体の組み立て後に副用不明のトラブルが頻出した。ガンダムが戦線に投入された後、通例とも異なるメンテナンス体制が敷かれたのは、これが最大の理由である。なお、ガンダムをベースに開発した地球連邦軍の主力機Ζでは、ブロック構造の採用には見送られている。

また、多数の技術者が集約することになった開発現場の混乱も無視できなかった。ガンダムの開発には、現場を監視し、開発の方向性を統御するリーダシップを持った人間の存在も重要だった。

実際、この首脳はヒル博士と、その配下の人間が發揮する数ヶ月の天才的機体のロールアウトは諦念に不可能だったたろう。

## Basic Knowledge of G

### 一年戦争の時代①

#### スペース・コロニーと宇宙移民

宇宙世紀と呼ばれる時代に入って、人類はすでに地球上だけでは暮らしていけないほどの人口を抱えるに至っていた。

この解決策として示されたのが、人類の宇宙への移民である。地球の衛星軌道上に建設されたスペース・コロニーには、旧世紀において新大衆が見えられた時期に、地上での生活が困難になった人間が次々と移住していた。

宇宙世紀が始まって半世紀が過ぎるころには、地球にはわずか20億の人間しか残っておらず、90億の人口は、6か所のコロニーと、月面都市に分かれて生活するようになっていた。

コロニーと地球の間には、地価的格差という関係が働いていたものの、コロニーが経済的に自立を果たしていることや、互いを顧みない距離もあって、比較的平和な時代が続いていた。一年戦争が勃発するまでは。

#### コロニー落しと衝撃

宇宙世紀0079年1月3日、スペース・コロニー、サイド3が、ジオン公国を名乗って独立戦争を始めた背景には、地球と宇宙移民との間の格差問題があつたとされる。



一年戦争の勃発は、さまざまな面で地球とそれを取りまく環境を一変させることになった。ここでは、その経緯について解説する。

それは他のコロニーでも同様であつたが、サイド3の性格的な動きには多くのコロニーが批判的だった（サイド6だけは、中立を表明していた）。それに対してジオン軍がとった戦術は、そうしたコロニーの住民をGGガスにより抹殺し、無人となったコロニー構造体を持ち上げと投下するというものだった（ブリ

ディッシュ作戦）。

ジオンの原動力はわずかなものだったが、この攻撃により、彼らが地球と人間に与えた被害は甚大なものとなった。全長30キロにのびる巨大大規模な落下した被害は、大陸の形状を変え、大規模な気候変動を引き起こして、地球環境を激変させたのである。

#### 宇宙世紀0079年の地球図





# ガンダムの設計思想

前項までに解説したように、RX-78-2 ガンダムは、当時の先端技術を野心的に取り入れた機体であり、同時に、あらゆる局面に柔軟に対応できる万能機として設計された。ここでは、その機体の詳細について解説する。

## MSガンダムとその構造

RX-78-2 ガンダムは、戦闘状態で機体を分離することが可能な、きわめて特殊な構造を持つMSである（この構造は、同系統のガンタンク、ガンキャノンにも採用されている）。

ガンダムの構造はおおまかに3つに区別できる。Aパーツと呼ばれる1半身ブロック、Bパーツと呼ばれる腰部から脚部を構成するト平生にあたるブロック。そして、コクピットであり、同時に戦闘機に可変するコア・ブロックである。

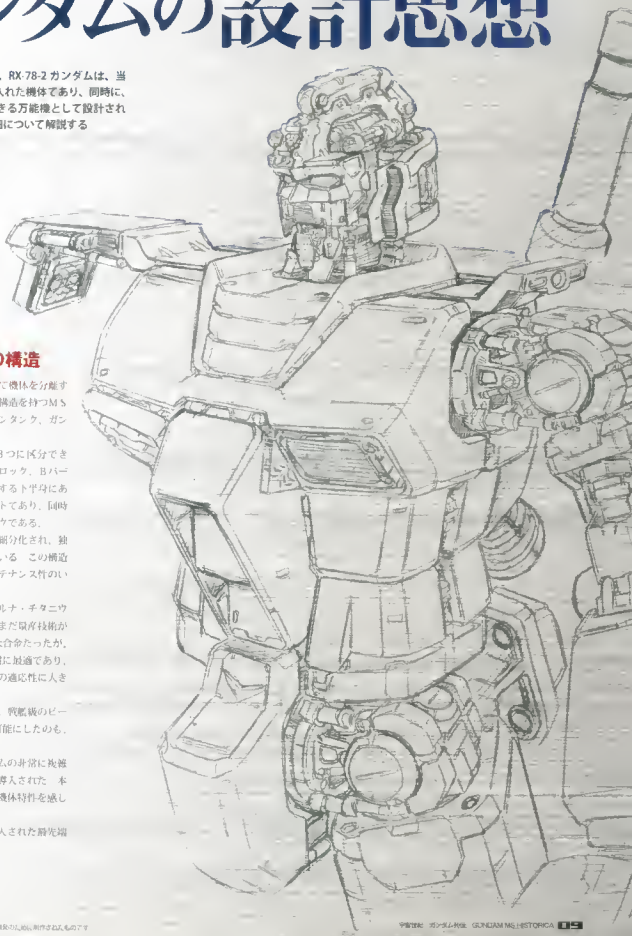
それぞれのブロックは、さらに細分化され、独立したユニット単位で構成されている。この構造により、ガンダムはきわめてメンテナンス性の高い機体になっている。

装甲 および内部構造材には、ルナ・チタニウム合金が利用されている。当時はまだ原子技術が確立されておらず、きわめて高価な合金だったが、その特性はMSなどの装甲、構造材に最適であり、ガンダムに要求された環境変化への適応性にも大きく寄与している。

ガンダムの名を知らしめたのは、戦艦載のビーム兵器の搭載ではあるが、これを可能にしたのも、この素材あってのことであった。

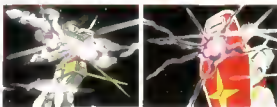
教育用コンピュータは、ガンダムの非常に複雑かつ精密な機体を制御するために導入された。本来、非常に扱いにくいガンダムの機体特性を感じさせない操作性を表現している。

本項では、これらガンダムに導入された最先端技術の詳細について解説する。



## ルナ・チタニウム合金

ガンダムではじめて採用された、ルナ・チタニウム。MSの進歩に不可欠だったこの合金の特性とは



ザクの主兵装である120mm弾の垂直発射時の運動に耐える

ルナ・チタニウムは、チタンをベースにした特殊合金である。軽量で耐熱、耐放射線耐衝撃性にすぐれるという特性を持つ。

RXシリーズは、実用機としてルナ・チタニウム合金の装甲や構造材を採用した。初のMSだった（正確には、他の素材を含めた複合装甲）従来の金属素材ではありえなかった装甲強度を持ち、大気圏突入時の高温状態

にさらされても、ほとんど劣化しないなど、サウナなどのシオソ型MSに使用されていた超硬アルミニウム合金に比べ、大きな優位性を誇る。だが、一年戦争当時はまだ生産上の歩留まりが低く、稀少な金属を必要とするところから、非常に高価な素材であった。そのため、地球連邦軍の量産機であるシムへの採用は見送られた。

## 教育型コンピュータと先進的操縦系

ガンダムを強力な機体たらしめたのは、装甲やビーム兵器だけではない。その操縦系にも先進技術が導入されていたのである。

教育型コンピュータシステムは、RXシリーズ、特にガンダムの機体コントロールには不可欠な存在だった。

MSの機体コントロールは、パイロットに高い熟練度を要求するものだった。MSの操縦は機体を操縦しつつ、さらに機体針路の決定、兵装の使用等を同時に行わなければならないからである。

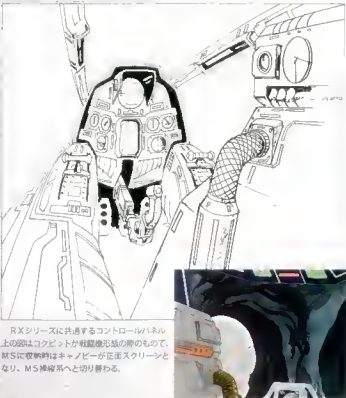
教育型コンピュータは、操縦の自由度を失わず、パイロットを補助するシステムである。最大の特徴は、言葉や所作からパイロットの意図を推測して、その操作を補助する機能だった。この機能は、パイロットの挙動をサンプリングすることにより精度を上げ、操縦の重くないパイロットにも熟練兵の操縦が可能とした。教育型の名はこの点に由来する。パイロットを教え、導きながら、同時に自らも成長していく、という意味である。もちろん熟練兵の操縦は、システムのサポートによってより効率化され、操縦者の負担を即座に

反映する操縦系を作り出すこととなった。

この教育型コンピュータという技術自体は、それとは少し異なるものではない。似た研究は宇宙世紀以前から行われてきたもので、実際、大型コンピュータ上で稼働している同様のシステムが、さまざまな研究開発などをサポートしている。

RXシリーズ搭載の教育型コンピュータが画期的だったのは、大型コンピュータでなければ実現できないと考えられていた、実戦に耐えうる高速度システムを、MSに搭載可能なサイズと強度、確実さは、兵器搭載システムとして最優先される性能である。で構築したことにある。

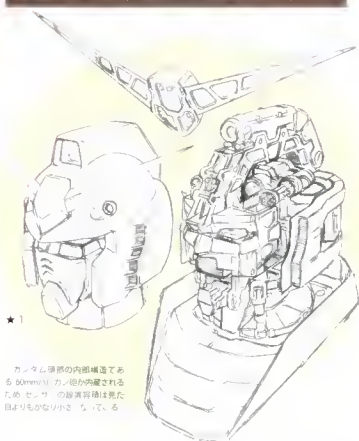
教育型コンピュータシステムの搭載によって、パイロットは操作の煩雑さにわずらわされることなく、作戦行動に集中する余裕を得ることになった。結果、短期間でのパイロット育成が可能となり、連邦軍は同システムでの陸揚隊を擁したシムの、短期間での戦線投入に成功している。



RXシリーズに共通するコントロールパネル上の頭部は、コックピットが前部視覚化の機軸のもと、MSに専断される「モニター」が正面スクリーンとなり、MS操縦者へ切り替わる。

## 頭部センサー

従来のレーダーが無効になった状況でも、センサー類が大幅に強化されたガンダムは、非常に広い索敵範囲を誇ったという。



ガンダム頭部の内部構造である60mmのカメラが収納されているため、センサーの設置場所は見た目よりもかなり小さく、

MSでは、頭部にあたる部位に各種センサーが収納されているのが普通である。本体から独立した、見通しのいい高い場所であり、ジェネレーターやビーム兵器の干渉からシールドしやすいためその理由である。また、頭部は回転機構を持つことが一般的であるため、指向性の強いセンサーのカバー範囲を変更するのが容易なことでも理由の一つとなっている。頭部が破壊された場合に備え、予備のセンサー類が機体各部に記されている。

ガンダムを特徴的な機体にしてる2つのアイカメラは、偵察射撃のための測距装置である。メインカメラの補器として使用されることもある。実際のメインカメラは、頭頂部に設置された頭冠状のブロックに収納されている。この高性能センサーは非常に広い視域範囲、長距離の赤外線から短波長のX線までを検出する

ことが可能で、光学的な情報収集は、これ単体ではほぼカバーすることができると。また、頭部を含む所にサブカメラが記されており、コックピットに映し出される操縦は、これらのセンサーからの情報を統合し、合成した映像である。

頭部のV字型の突起は、無線通信用のプレートアンテナである。ミノス系パイロットの干渉で長距離の無線通信が難しい状況にあるとはいえ、短距離での通信には無難に用いられている。ガンダムのアンテナは特に電波干渉対策がなされており、音声や低周波数の映像程度で中断することなく通信可能な性能を誇る。

これらの装備から得られる情報は、コア・ブロックのメインコンピュータに送られるが、頭部のコア・プロセスでもある程度の処理を行い、メインコンピュータへの負担を減少させている。

## 7基の熱核融合ジェネレーター

最新鋭MSガンダム。その高い性能を支えるのは、7基も的大出力ジェネレーターである

ガンダムには合計で7基の熱核融合ジェネレーターが搭載された。メインジブは、コクピットブロックを兼ねるコア・ファイターに内蔵の2基の大型ユニットで、腰部にはそれぞれ背部ラントセル内に2基、脚部に1基。そして左右の脚部に1基ずつ内蔵されている。

このように、複数のジェネレーターが機体全体に分散して配置されている理由も、ガンダム本体が必要とするパワーを供給できる大出力ジェネレーターを単体でマウントするのは効率が悪かったこと、機体が分離する構造を持つため、それぞれのパーツに独立して動力を供給する必要があったからである。

各ジェネレーターは、状況に応じて機体全体にパワーを供給するが、通常はそれぞれ役割に従って機能している。

コクピットブロックにある2基のメインジェネレーターは、機体全体の動力を支えかねない主眼である。また、緊急時には、背部メインスラスターの補助動力としても機能する。

ラントセル内に収容された2基は、主にスラスター駆動とビーム・ライフ/ビーム・サーベルへのパワーを供給する。ライフは、別項で解説するエネルギー・CAPによって、それほど大きなパワーを必要としないが、発射時に始動電力を消費する。また、ビーム・サーベルの駆動にも、常時大電力が消費されるため、全体の安定化のために専用動力が準備されているのである。

腰部ジェネレーターは、全体の動力の補助。特に背部のジェネレーターと協調して、兵器稼働時の動力サポートを担当する。

脚部の動力、および脚部にマウントされたスラスターを駆動するのは、脚部に収容された2基である。地上やコロニー内のように、下半身に機体の重量がかかる環境では、脚部駆動系は相当量のパワーを消費するうえ、脚部スラスターの使用頻度が高くなる。このため、脚部にはメインジェネレーター級のもので独立して設置されている。

■ジェネレーター位置



## 高いスラスター出力

MSにとって機動力は重要な要素である。ガンダムには、高い運動性を発揮する、大出力スラスターが複数装備されている。

サクが登壇した時点では、MSの敵は小回りのつかない艦艇にだけあった。したがって、標準的なサクには、取り回しを困難にする大出力スラスターの採用は見送られた（一部のエース機は例外）。

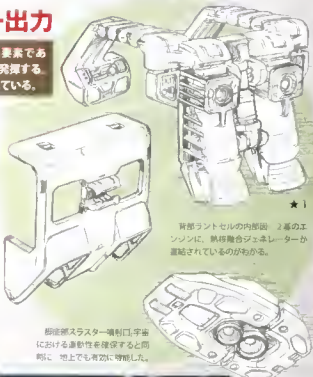
たが、対MS戦を最初から想定していたガンダムには、高い機動性が要求された。MSとの戦闘では、相手を上回る機動力を持つかどうかで優劣を決することになるからである。

機體をサポートする教習型コンヒュータの搭載もあって、ガンダムはサクのエース機以上の出力を持つスラスターを装備し、効率的に機能させることが可能だった。

特に大出力を要求される背部、および脚部底のスラスターエンジンには、費用のジェネレーターが直結されていた。独立した動力系のおかげで、大きなパワーを消費するビーム兵器を使用する際にも、ガンダムの機動力は低下しなかった。

また、脚部のスラスターは複数の関節を持つ関節にあるため、真にさまざまな方向への噴射が可能で、すぐれた姿勢制御能力を有していた。

この大出力スラスターは、重力下でも有効に機能した。歩行用の脚部だけではなく、地上近くを低速で移動することしかできなかったが、スラスターを併用することで、航空能力に対抗できるほどの機動力を発揮したのである。



脚部底スラスター噴射口。宇宙空間における運動性を確保すると同時に、地上でも着陸に機能した。



姿勢制御を行うため、ラントセルのメインスラスターには、電圧調節/スガが併用されている。

## フィールド・モーター

ガンダムの運動性を実現した新型駆動系。それがフィールド・モーターである。ジオン製MSとの違いはどこにあるのだろうか

フィールド・モーターは、ミノフスキー粒子の構成する力場（フィールド）と、ミノフスキー粒子そのものの干渉を利用したモーターの名前である。高出力、高トルクを実現しながら、同時に高い効率と小型化が可能で、ルナ・チタニウム合金製フレームで構成することによって、非常に強靱な駆動構造を持つこととなった。

ガンダムには、このフィールド・モーターと、サクなどにも採用されている油圧ダンパー方式とよばれる駆動系のハイブリッドシステムが採用されている。

油圧ダンパー方式は、ジェネレーターの出力を物理的な圧力に変換。特殊な液体（油圧式と呼ばれる）が、實際は動力伝達用に調整されたオイル状の液体である）を介して駆動系へと伝達するものである。比較的単純な機構であるため経年劣化、高出力化が容易で、メンテナンス性も高い（ただし、慣性内に動力伝達部がスペースを取るため、サクなどでは、動力パイプがむき出しになるという構造上の問題を抱えている）。

ハイブリッド方式では、通常の駆動駆動はフィールド・モーターが担当し、大きな急激な力がかった場合に、油圧ダンパーがアシストする形となる。

これは、ガンダムがMS同士の白熱戦を想定した仕様になっているためである。巨大なMSの持つ運動エネルギーは非常に大きく、わずかな接触でも関節系に過大な負荷がかかる可能性があった。ガンダムで、一つの駆動系に複数の方式が採用されたのは、この負荷を分散するためのものだった。

ジオン軍ではこの方式を採用した機体は、大戦末期まで登場していたといわれている。この技術は開発後に高度化されたもので、ジオン軍に渡ったのは戦後になってからだった。大戦後期のジオン製MSが留った戦果を残せなかった理由の一つは、旧型の駆動系を採用せざるを得なかった点にあるとも考えられている。

### フィールド・モーター式関節駆動

各関節のモーターで電力の力を供給する方式なので、関節内部に余熱がたまりやすい。



フィールド・モーターと油圧ダンパーのハイブリッド



油圧ダンパー式関節駆動

関節駆動と外力が加わる際に油圧ダンパーを使用するのではなく、油圧は駆動系が、入出力パイプが機体内に収まる。駆動系は、外に動力パイプを使用。



油圧パイプ 油圧ダンパー式 関節駆動および ショックアブソーバー

# コア・ブロック・システム

RXシリーズのコックピットは、同時に可変戦闘機でもある これは他に類を見ないシステムだった。

## ガンダムの頭脳



アムロ・レイは、このコックピットシステムのガンダムを最大限に引き出した人物である。

コア・ファイターは、可変機を持つ戦闘機であると同時に、RXシリーズの共通コックピットでもある制宙域の核となる教育型コンピュータシステム一式も、この機体に搭載されている。  
脱出コックピットシステムとしては大きさに思えるが、これはRXシリーズの実データ回収を最優先にした結果のことである

## FF-X7 コア・ファイター

SPEC

全長 5.6m  
全幅 5.6m  
全高 1.2m  
全備重量 8.5t  
大気圏内最高速度 M4.8  
武装 ユーロII・バーナー  
高4枚  
30mm 2連装バレット・砲

## RXシリーズ間の互換性

## 超小型両用航空機

戦闘機としては非常に小型な機体ではあるが、MSを駆動可能な大出力ジェネレーターを2基搭載し、大気圏内はもちろん、宇宙空間での運用も可能である。

ただし、MSのコントロールシステムを搭載し、コックピット形態への可変機構を持つ関係上、戦闘機としての性能はそれほど高くない。

また、機体に最低限の武装は備わっているが、あくまでこれは自衛用の装備で、積極的な実戦投入を想定したものではなかった（機体的な実戦投入不足にあってホワイトベース隊では、実際に攻撃機として使用されたこともある）。



カンタンクのAパーツを撤廃し、上昇し、投下されたハートと キングス号のコア・ファイター

カンタンに収容された1ター・  
カンタンに格納するまでの1ター

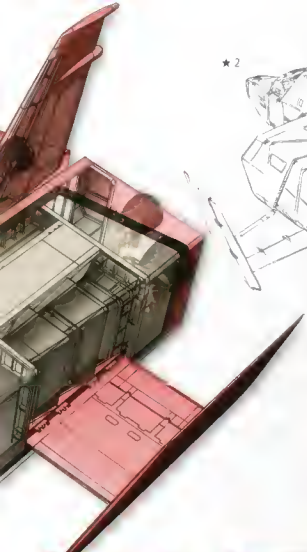


コア・ファイターは、RXシリーズ内で完全な互換性を持つように設計されている。ホワイトベース隊の戦いでは、実戦中に機体パーツを換装し、コックピットから出ることなく別の機体に乗り換え、再出撃を行ったという記録が残されている。これは設計段階から想定されていた運用法ではあったが、結局実戦ではそれほど多量に用いられることはなかったようである。後に、このコックピット換装システムを流用して、航空機用エンジンを搭載したモジュール・システムであるGハーツが登場している（このシステムは非常に有効に機能し、ガンダムの運用性をさらに向上させている）。

RXシリーズの3機はそれぞれ機体バランスや運用法そのものが大きく異なっているが、教育型コンピュータがその差異を吸収して、パイロットは運用面の違いを意識する事は、その他の機種に關して違和感を感じることがなかったという

★1  
イラスト 星野秀輝

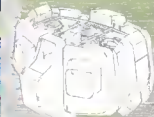




★ 2

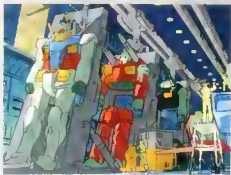


コア・ファイターを中心としたガンダムの分解図。変形した機体が中央に収納される。



## モジュール・システムの核

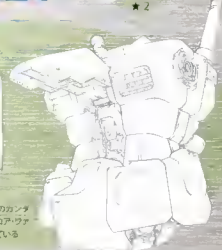
ホワイトベース内でハイツ分割されたR×S  
リース通常はハンガー上で複製作業が行われる。



★ 2



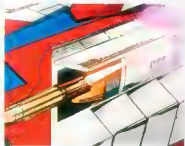
メンテナンス作業中のカンダム。カバーが開放され、コア・ラジエーターの機首が露出している。



## 武装



コ・イター機体中央部に装備された2基のミサイル・ランチャー。初期試作機では1発しか発射できなかった。



機首の2連装機銃。収納できる弾倉のサイズが限られるため、必然的に搭載弾数は少ない。

コア・ファイターは、ファイターの名の通り、戦闘機として設計された機体である。武装は機首の2連装機関砲と、機体中央の2基のミサイル・ランチャーのみで、スベック的には平均的な戦闘機として使用することが可能だったが、実戦で使用するには心もとない機体であったことは否めない。

ただし、後にGパーツによって強化された機体を実戦投入され、一定の戦果を挙げている

77

コア・ファイターは、前述の通り、教育型コンピュータを核とした操作、制御系をつかさどり、データの蓄積を行う。

航空・宇宙両用のジェット/ロケット・ハイブリッド・エンジンとしても機能する2基のジェネレーターは、ガンダムの主推進器であるラントセル部のスラスターをドライブするなど、RXシリーズMSの動力の要でもある。ガンダム、そしてRXシリーズの文字通り「核」となるべく生み出されたのだ。

RXシリーズは、このコア・ファイターを中心とした、コア・ブロック・システムと呼ばれるモジュール・システムを形成しているのが特徴となっている。

翼と機首を折りたたんでコア・ブロックという形態を取ったコア・ファイターを、MSの上半身であるAパーツと、同じく下半身であるBパーツで組み込むようにして連結する。

100

と、MSが完成する

このシステムは、MSを分割したブロック単位で搬送し、現場で状況に応じて換装。最速の機体で戦闘に対応することを可能としていた。このため、RXシリーズは、ガンバリーと呼ばれる専用搬送機を使い、戦場での換装を行ったこともある。

ただしそれは、アムロ・レイが搭載するガンダムにおいてのみである。

白兵戦用MSに位置づけられていたガンダムではあるが、驚異的なまでの汎用性の高さを誇る機体ゆえに、極端にいえば、ガンダムで出撃すればどんな状況でもなんとかなってしまったのだ。

ではこのシステムが無駄だったのかといえ  
ば、決してそんなことはない。アムロが、ア  
バオア・ターから生還を果たしたのは、コア  
ファイターがあったからなのだから。

# Weapons of GUNDAM

ガンダムの武装といえば、ビーム兵器の携行ばかりが取りざたされるが、このMSは、万能ともいえるほどの多彩な兵器を装備可能な機体でもあった。

## MS初のビーム兵器

本来、メガ粒子砲と呼ばれるビーム砲は、遠距離戦の大規模な兵器を必要とするものだった。それはガンダムでも例外ではなく、搭載されたジェネレーターは高出力ではあったが、艦船に装備されていた形式のメガ粒子砲は駆動するにはスペック不足だったことを解決したが、エネルギーCAPなる技術であった。メガ粒子とは、ミノフスキー粒子を駆使することで発生する高エネルギー粒子の名称だが、この技術は、メガ粒子発生前まで圧縮したミノフスキー粒子を、そのままの状態で保持するというものである。

RXシリーズのビーム・ライフルは、この技術を用いてライフル自体にエネルギーを充填しておくことで、戦艦級ともいわれるビームを連射可能にしている。

ビーム・サーベルは、エネルギーCAPによって保持された高エネルギー状態のミノフスキー粒子を放出、1フィールドおよび編組によって連続的に攻撃さ

せたものである エネルギーCAPシステムは柄に内蔵されており、刀身形成するフィールドはMSからの電力で発生する また、短時間ならM5の手で離れても、柄にチャージされた電力でフィールドを維持して、ビームの刀身を伸長することが可能だった

サーベルの柄は伸長して、投擲(シャベルン)状態に変わることができた この場合、ビームは先端部に集中し、穂の穂先の形状となる

### ビーム・シャベルン

ビーム・シャベルンはサーベルの投擲形態である



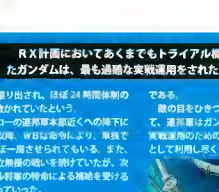
### ビーム・ライフル

ガンダム専用ビーム・ライフル、小口径砲だが、エネルギーCAPによって戦艦級の威力を誇る



### ビーム・サーベル

MS間士の格闘戦を初めに開発された兵器 対艦戦用に関与されたザクらのレーザー、コアの威力をはるかに上回る



## 実弾兵器

ガンダムの頭部には、近接戦闘用の補助兵器として、60mmバルカン砲が2門装備されている 装弾数が少なく、威力もそれほど高くないが、近距離で直撃すれば、サク程度の装甲のMSならは行動不能にすることは可能である

携行兵器としてライフルにならなくても多用されたのが、ハイパー・ハスルーと呼ばれる5連発の380mm口徑コック・アンド・ローダーである

高速で移動する宇宙での戦闘においては、MSへの攻撃では回避されてしまうケースもあったが、ビーム・ライフル以上の破壊力を持つことから、主な兵器のひとつとなっていた

### 60mmバルカン砲



頭部バルカン砲は近接戦闘用には、威力もそれほど高くないが、近距離で直撃すれば、サク程度の装甲のMSならは行動不能にすることは可能である



## 実戦中の運用テスト

RX計画においてあくまでもトライアル機として誕生したガンダムは、最も過酷な実戦運用をされたMSとなった。

ジオン公団の攻撃を受け、正規乗員のほとんどを失ってサイド7を逃げ出したホワイトベース(以下WB)だったが、やがてその艦船から、駆逐艦のようなジオン軍に攻撃されるようになっていった。その数週間、ガンダムは、わずか数ヶ月の間に長距離移動の難を越えた出陣回数、戦闘を継続することになった。

M5もまた、単なる兵器である。使えば消耗するし、トラブルも発生する。そして、最新技術の塊のようなRXシリーズである。特に主力であるガンダムは、複雑なメンテナンスと補給を必要としたはずだ。格納庫では整備に耽溺される量産機たちの姿が見られ、時にはパイロット

すらも乗り出され、係任 24 時間体制のシフトが敷かれていたという。シャローの運搬車本近くへの降下に失敗して以降、WBは宙中により、単独で地球をほぼ一周させられてもいる。また、当初は孤立無援の戦いを続けていたが、次第にレール軍の特命による補給を受けるようになっていった。

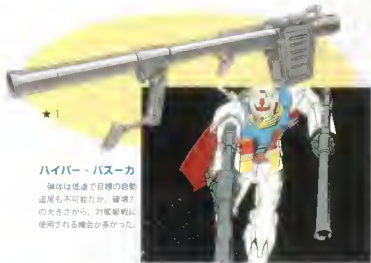
これには明確な理由があった。MS運用において一日の長があるジオン軍に打ち勝つためには、運搬車は単独にMSの戦術データを収集する必要がある。その点ガンダムの、汎用性と耐久性の無界に勝つような貴重な戦術の日々から得られたデータは、何よりも貴重なものだったはず

である。敵の目をひきつけていることを利用して、運搬車はガンダムとWBを、MSの実戦運用のための、格好のテストケースとして利用し尽くしたのである。



メンテナンス時のガンダム、主軸に多数のパーツが配され、その内部にアクセスし、修理・補給に注いでいる。



★1  
ハイパー・バースカ

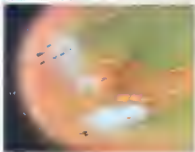
弾速は低速で目標の自動追尾も不可能だが、破壊力の高さから、対艦戦に使用される機会が多かった。

## 大気圏突入用装備

V作戦が開始した当初から、地球連邦軍は軌道より直接M5を戦艦投入するという構想を持っていた。ガンダムに搭載された大気圏突入用装備は、その試案として実験的に導入されたものである。

大気圏への突入の際に問題となるのは、機体前面で圧縮される大気による、1000度以上の高温である。ルナ・チタニウム合金は耐熱性能がきわめて高いものの、そのままでは大気圏突入による大気圧縮に伴う空力加熱と応力に耐えることはできなかった。

このため、機体表面の温度上昇の抑制と、複雑な形状による気流の複雑化を防ぐ目的で、ガンダムには超高温耐熱フィルムが装備された。この機能の有効性は図らずも、ガンダムの実戦運用が地味までほどな証明されることになった（TV版の設定。ちなみに劇場版では、香を耐熱シールドとして用いながら、M5本体から冷却ガスを噴射する冷却と、機体の空力圧力からの保護を同時に行うという方式に置き換わっていた）。

★1  
耐熱フィルム★1  
耐熱フィールド

## その他の装備

ガンダムの実戦運用の間、器も多用された装備は、いわゆる「重」シールドであろう。ルナ・チタニウム合金の装甲を持つとはいえず、実戦ではどんな形でも機体が装備するシールドは、多くの場面で機体の致命傷を防ぎ、あるいは図となり、武器にすらなった。

シールド表面は、マニピュレーターで保持するための可動式グリップと、ガン

ダム本体の各所にあるマウントラッチに接続可能なジョイント部がある。シールドに限らず、ガンダムの装備は機体にマウントすることが可成り、同時に多数の装備を預けることもあった。

ガンダム・ハンマーはその名の通り、チェーンでグリップに接続された、巨大な金属の球体を投擲するというシンプルな兵器である。後にスラスターを内蔵したハイパー・ハンマーが登場している。

★1  
シールド

ガンダムの装備は、機体各所のマウントラッチに取り付けられる。拘束を使うライフルの精密射撃のために、シールドを背面に回すこともあった。

★1

★1  
ガンダム・ハンマー

およそM5という高度技術の産物にはなつかわし、ないように見える「銃盾」だが、真骨か生も威力は意外に凄なかった。

★1  
ハイパー・ハンマー

スラスターを内蔵した「パワーアップ」を四つ改定タイプ。だが、大戦後に登場した量産M5には適用しなかった。

## 進化するRX-78-2

幾多の過酷な実戦を経て、パイロットのみならず、MSガンダムもまた大きく成長する。

ガンダムは、頻繁なメンテナンスに加えて、それまでの実戦および機体データをもとに、常に小規模なバージョンアップが行われていた。

大きな仕様変更は行われなかったものの、より精度の高いパーツへの交換や、おなじ機能を果たすより効率的な装置への置き換えが図られていた。

この結果、ガンダムの性能は徐々に向上を見せ、パイロットの熟練度を抜きにしても、当初想定していた以上の環境への適応性と、性能を示すようになっていった。

特に開発陣を驚かせたのは、追加投入されたモジュールシステムであるGバー

ツ(P16～17に巻述)。予想された以上に有効利用されたことだった。

通常であれば、新しいモジュールを使いこなせるようになるには一定の訓練と時間が必要になる。ガンダム専用に開発されたとはいえ、初めて投入されたモジュールを実験で使用し、期待された以上の戦果を獲すなど、常識的に考えればありえないことだったといえる。

その後、水中戦を繰るなどして、ガンダムはさらに機体の更新や調整を重ねていった（ジャブローでオーバーホールを受けた際には、すでに内部は別の機体と書いているほどに定説していたという）。

このように、1機のM5としてはありえ

ないほどに戦闘を繰る。最進化を遂げたガンダムは、ザクやグフ、ドム以上に完成された機体へと成長し、量産機にも劣らぬ実戦を次世代のM5型に大きな影響をあたえることになったのである。



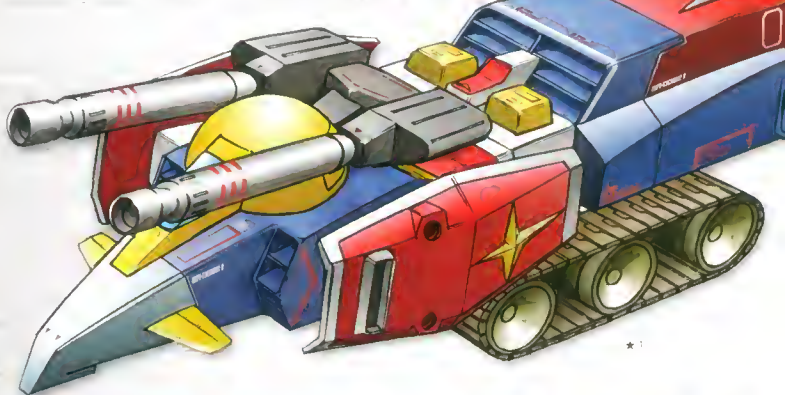
補給部隊のミデア輸送機。任務途中で敵の襲撃にされ、撃破された機体も多かった。



ホワイトベース軍の兵隊達。マフレダ少尉、彼女の姉妹は、量産の兵器にたいへん危険なもだった。

# Gアーマー

Gアーマーはガンダムを強化する追加モジュールである 本項ではその機能と性能について解説する



★

## ガンダムの性能アップと支援

大戦も末期に近づく、ジオン公国軍も次々と新鋭機を投入するようになった。時に地上で大きな脅威となったのは、MSに飛行性能を付加する、ト・ダイヤスなどのサブ・フライト・システムであるMSが立った状態で搭乗可能な平版な機体を持ち、地表での機動性に欠けていたMSの欠点を補うものだった。

ホワイトベース隊は、ヨーロッパ戦線付近でこの新種の航空戦力を手に入れることになったが、そこへ支援のために投入された機体が、Gハーツと呼ばれる新システム・システムだった。

Gハーツは、単体ではGファイターと呼ばれる巨大な戦闘機の形状を取る。この機体は大型メカ粒子砲を装備した機首部分(Aパーツ)と、大出力スラスターの装備された後部(Bパーツ)とに中央から分離することによって、機体中央部に設けられたスペースに、ガンダムを積み込む形で収納することができる。

ガンダムを収納したフル展開の状態(胴体および腹部を覆う装甲がないため、装甲がわりと薄い)でシールドを全分1枚使用する。当初、シールドは回収できない場合放棄していたが、後に2枚を重ねるジョイントが装備されたGアーマーと呼び、このまま大型戦闘機として運用

することが可能だった。

また、空中で分離、ガンダムを放出することで、遠隔地にある前線にガンダムを直接投入することが容易となった。これは大きな戦術上の優位をもたらした。完全な航空機形態を取ることのできるGアーマーでは、シオン軍の採用しているサブ・フライト・システムよりも急速な飛行が可能で、敵から確認、攻撃を受ける危険が大幅に減少した。また機動力、防御力ともに高く、敵の射撃圏内であっても強行偵察、および攻撃を可能とした。

突出した戦闘能力を持つアムロ・レイ搭乗のガンダムが、敵艦深く侵入可能になった戦術上の意義は大きく、戦場では、ガンダムによって敵艦が混乱させられる場面が数度となく見られたという。



## 武装

Gハーツは、武装強化のためのモジュールでもあった。

Aパーツに搭載された大型メカ粒子砲は、ガンダム装備のヒーム・ライフルより高出力であった。艦艇に搭載されたタイプにパワーでは及ばないものの、それに近い威力を持ち、連射が可能であったため、実戦ではかなり大きな戦果を残している。

その他、Gハーツはその余剰スペースを利用して、多くの小型ミサイルを搭載している。Aパーツの機首の対空2連ランチャー およびBパーツ底部に装備された対地攻撃用4連ランチャーは、ヒーム砲の死角を埋めるものであると同時に、空中攻撃の際の機運用でもあった。



・分離 放出する戦闘機  
近距離ではあるが、この  
ガンダム最大の弱みだ。

## Gスカイ

コア・ファイターの  
不足を補う強化型



## Gスカイ・イージー

ガンダムBパーツを併せた  
スカイの発展形態



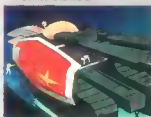
## Gフル

Aパーツとコア・ファイター  
で構成された戦闘車両形態



## Gフル・イージー

Gパーツのうち、Aパーツ  
のみを使用する軽便形態



## Gファイター

Gパーツの基本形態、サブ・  
フライト・システムでもある。



## ガンダム高機動型

ガンダム+大出力スラスター  
原形の装置で実現したらしい。



Gファイターの発展、ガンダムを寄せ、  
この直後Gフ+GダイグSを撃破している。

## Gメカ

このモジュール・システムにおいて特筆すべきは、ガンダムの各パーツとGパーツ間の組み換えによって、局面に応じた柔軟な運用を可能とする点であろう。こうしたパーツ組み換えによって構成される戦闘マシン群を総称してGメカと呼ぶ。このGパーツが支給された直後、ガンダムは、まったく別機としてGファイターをサブ・フライト・システムとして使用し、クワット・タイYSの部隊を撃退した。これは、ガンダムを含めたモジュール・システムが、想定を超えて有効に機能した証拠であろう。

また、コア・ファイターをそのままBパーツに

連結し、高速戦闘機として使用したGスカイ（およびGスカイ・イージー）は、余剰機材と人員の有効な活用手段となった。

Gフルは、コア・ファイター、およびガンダム、Gパーツ双方のAパーツを接続し、ビーム砲を主砲とした戦車とするものだった。しかし、これはMSとしてガンダムを使用できないため、Gパーツのみのイージータイプも使用されている。

珍しいところでは、ガンダムの上半身とGパーツのBパーツを接続し、高機動宇宙戦闘機としてシオン軍のモビルアーマーに対抗する形で運用されたこともあった。

## コア・ファイターを利用した高性能戦闘機

## FF-X7-Bst コア・ブースター

コア・ファイターのもう一つの強化系。シンプルかつ高性能な増設ユニット、コア・ブースターはいかなる機体だったか。

劇場版版では、Gパーツは、コア・ブースターというコア・ファイター強化ユニットに置き換えられている。

これは、コア・ファイターに欠けていた推力と、攻撃力を補うための増設ユニットであった。

この装備を得たコア・ファイターは、航空/宇宙戦闘機としてトップレベルの能力を獲得するにいたった。

機体の左右に設置された固定式のメガ粒子砲は、ガンダムに設置されたビームライフルに匹敵するかそれ以上の出力を持ち、ガンダムよりも多い弾数を撃てる。これは、コア・ブースター内の大出力ジェネレーターによるものである。

この機体は、大戦末期のサイド3進攻作戦とはほぼ同時に投入され、ほとんど宇宙空間で運用されている。ただし、性能

的には大気圏内飛行も可能だった。

基本的に高速戦闘機としての運用を想定された機体だったが、RXシリーズに遠なる機体らしく、汎用性の高い余裕の大きい設計になっている。

大戦末期、ジオン軍はモビルアーマー（以下MA）なる機体を投入している。これは、MSのようにマニピュレーターや歩行脚などを持つ大型機動兵器（巨体）を利用した大推力や火力を特徴とする。だが、コア・ブースターは、それに対する連射の回数と見るとそこそこだった。

固守のために真大気圏内や宇宙を必要とするMAに対して、おなじ用途で安価かつ高機動なコア・ブースターを投入し、実際にMA以上の成果を挙げた連射機が、一年戦争を制したという事実は、ある意味必然の帰結だったのかもしれない。

## SPEC

全長 / 13.5m  
全幅 / 11.5m  
最大加速 / 垂直 / 100G  
最高速度 / 音速の3倍  
3000km/h (マッハ2.5)



ホワイトベースに  
搭載された2機に  
は、セイラとスレッ  
ガーが搭乗した。

## ガンダムの同系機たち

RXシリーズはガンダムの他にも同系機が存在する ともに一年戦争を戦い抜いたMSたちを紹介しよう

## バランスの良い中距離支援機

## RX-77-2 ガンキャノン

ガンタムの陰に  
隠れた名機

RX-77-2 ガンキャノンは、ガンダム同様にV作戦から誕生した地球連邦製試作MSの1機である。

先端技術を大量に導入し、実験的に超高性能機を造り出そうとしたガンダムに対して、ガンキャノンは、ある程度性能を絞ることで、安定した運用の可能な機体をめざして開発された。

もちろん コア・ブロック・システムを始め、チーム・ライフラインなど。カンダム同様の新型装備を持つため、ザクのような安定感も望むべくもなかった(稀なメンテナンスなしでトラブルのない運用は困難だった)ものの、教育型コンピュータによる補正もあって、比較的にパイロットを選ばない、操縦しやすいMSであった。

この機体が本来の性能を発揮するのは、中距離での狙撃と、重距離からの砲撃戦であろう。特に、この機体を特徴づけている肩部にマウントされた240mmキャノン砲は、要塞攻略戦や、敵陣に対し

[illegible]

## SPEC

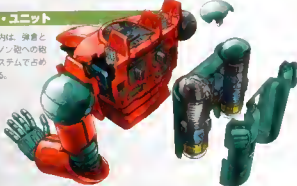
鋼板厚 20  
 本は半通 0r  
 全通半通 0r  
 長さ 1.5m 出サ 500W  
 ヘスタ 電力 1800W  
 セ 100 有効半通 5000m  
 装飾11個 レイ・ネタ 1000  
 式品 1.5m 1.5m  
 240mm 半 1000  
 手付は  
 スワ 1.5m  
 60mm 1.5m 1.5m  
 1.5m 1.5m

力キ  
は主にカイ  
- か揉まれた



ボディ・ユニット

上半身内は、弾倉と高圧キャノン砲への砲弾供給システムで占められている。



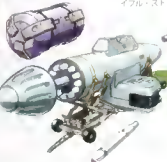
## 240mm キャンノン砲

ガンキャンの主力兵、大気やミノフスキー粒子による威力の減衰を避けるため、ビーム兵器ではなく、実弾兵器を採用。速射性にも優れていた。



**ハンド・グレネード**

両脚部のラックに 3 発ずつ収納されている手榴弾。発射時の衝撃が強く、使用



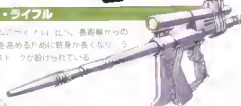
ヘッド・ユニット

1. ケーブルにセンサーを、マイク部に各種センサーを装備し、さらに有効範囲の広いものを採用している。人器制御用コンピュータでも搭載。



チーム・ライフル

ラ・マム・ド・イ・ア・レ 比、長距離からの  
命中精度を高めるために銃身が長くなり、ラ  
イフル・30. 06 が贈けられている。



## スプレー・ミサイル・ランチャー

2. 遠征のしやすさ、補給のしやすさ、情報の代わり  
玉周にできること、使用用途、近距離攻撃用、  
遠距離攻撃用、中距離攻撃用、使用頻度は不明

## カンキャンの 機体構成

カンキャノンとカンダム設計には、多くの共通点が見られる

両機ともコア、ブロック、システムを採用していることもあり、機体の基本フレームはガンダムと共通しており、機体各部に複数のジェネレーターを持っている。そのため出力にも余裕があり、消費電力の大きい大型のビーム、ライフルを運用することができた。

また、ビーム・ライフルによる精密射撃も想定した設計になっており、各関節の動作の精度は、非常に高く設定されている。

駆動系には、やはりガンダムとおなじくハイブリット方式のフィート・モーターが採用されているが、砲撃の際の反動に備えてトルク重視の仕様になっていて耐久性も高い

また肩部キャノンの他、スプレー・ミサイル・ランチャーなど他の兵装への換装を比較的容易に行うことかできる



## ヘッド・ユニット

頭部は目視による手動を前提とした、砲撃の必要を感じないほどの、破壊の即断便する危険が大きい。出撃の危険も指摘されている。



## ハイブリッド式エンジンとキャタピラ

無核融合ジェネレーターとカスタービン・エンジンの二刀流。ホバーを用いたキャタピラによる移動は拡張性が高く、機体への負荷も少なかった。

## カンタンクの機体構成

ガンタンクには、ガンダムやザクなどのMSと同様に、無核融合ジェネレーターが搭載されている。加えて、キャタピラによる駆動のためには通常燃料によるガスタービン・エンジンが装備されるといった、ハイブリッド方式が採用された。

胸部周辺のフレームは、ガンダムなどと共通のものである。先行してロールアウトしたこの機体は、ガンダムなどのテストベッドも兼ねていたようだ。

シンプルな構造だけに、この時代のMS中、特に堅牢な機体の数に入る。また、ルナ・チタニウム合金製の、カンキャン以上重量装甲をもつがゆえに、耐射・耐爆性能は非常に高い。



ホワイトベースの砲撃として使われることもあった。

## 連邦MSの先駆け

# RX-75 ガンタンク

## 砲撃戦に特化した機体

RX-75 ガンタンクの形状は、RXシリーズの他の2機と大きく異なっている。MSの名を冠してはいるが、戦車に人型の上半身を載せたような形状をしており、巨大なキャタピラとホバー用スラスターで移動する。MSの大きな特徴である、「人と同様に簡単に武器を持ち替えられ」「精密な作業を可能とする手や指」も持っていないかった。

MSの歩行システムに関するノウハウが少なかつたことなどの理由もあるが、連邦の、一年戦争におけるMSの重要性に対する認識不足が生んだ仕様だといえるだろう。ただし、この機体はRX計画最初期に設計されたものであり、ガンダム、カンキャンの開発に伴ってコア・ブロック・システムを搭載するよう改修を受け、白兵戦を前提としない後方支援用MSとして位置づけられた。

この機体は、2つのコクピットを持つコア・ファイターの格納された胴体に操縦者用、胸部に砲手用が設けられている。テスト運用の最中だったためか、胸部コクピットは透明キャノピーに覆われているものの、事實上出撃に近い状態であり、後に胸部コクピットでの単独運用ができるよう変更された。

両肩に装備されている主兵器

120mm キャンノ砲は、砲点攻撃や長距離からの支援攻撃に威力を発揮した。胸部に装備されている40mm ボップ・ミサイルは、連射が可能だった。

ガンタンクは何基かのスラスターを持ち、宇宙空間で運用され空陸両戦をした記録も残っているが、機動性は非常に低い。一方、脚でなくキャタピラによる走行は、MSの弱点である「地上での行動範囲の狭さ」を解消している。

サイド7でのテスト中だった複数の機体が、強襲したザクによって破壊されたが、無事だった1機はホワイトベースに収容され、運用された。



ハヤトコバヤシが操縦コクピットに座り、リュウ・ホセイが胸部に搭乗しての出撃が多かった。

## 4連装ボップ・ミサイル

最大射程 20km の近・中距離用兵器。胴部全体をランチャーと給装填機構が占めており、砲としての機能は限定されている。

## 120mm 無核融合キャンノ砲

最大射程 240km を誇る大口径砲。宇宙空間での使用を想定し、低反動機構が採用されている。口径は小さいが、威力は極めて大きい。

## SPEC

機体高	15.0m
本体重量	58.0t
全重量	88.0t
ジェネレーター出力	878kW
スラスター推力	88,000kg
装甲材質	ルナ・チタニウム合金
主砲	120mm 無核融合キャンノ砲×2
4連装ボップ・ミサイル	×2

★2



# ガンダムのサポート・メカ

ガンダムにはホワイトベースの他に、その運用をサポートするメカが準備されていた。

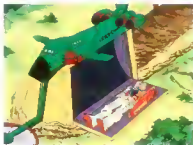
## MS 輸送回転翼機 ガンペリー

### 汎用性の高いサポート用航空機

MSを実戦で運用するためには、サポートシステムの形成が必要である。ホワイトベースの第3デッキに格納されていたガンペリーは、ガンダム等のMS専用輸送機で、大気圏内での回転機だ。MSは単独での飛行、長距離の高速移動が不可能だったため、MSを戦闘地域に送り込むために開発されたものだ。

機体は既存の技術で造られたものではあるが、MSを収め、移送するためのコンテナは、状況にあわせてさまざまな方向に開閉するよう設計されており、空中機転のための投下モードや、A・Bパーツが分離した状態で輸送などに、幅広く対応している。

また、MSばかりでなく、いろいろな物資や避難民の輸送などにも活躍した。



SPEC

全長	27m
全高	34.0m
全幅	25.5m
重量	185.0t
武装	大型ミサイル×6

最速機動等や遠距離飛行が可能。MSの投入や回収には、着陸のしない場所まで移動する必要があり、からである。ミサイルを投擲して出撃することも。



## Basic Knowledge of G

### 一年戦争の時代②

#### ジオン公國軍の地上侵襲

地球連邦政府への宣戦布告の地に行われた、サイド3への攻撃、月面都市の包囲、そしてコロニー落とし……。ジオン公國では周到に準備が行われていたらしく、作戦は迅速かつ万全な体制で行われたが、地球連邦軍の戦況を促すには遅らなかつた。そこでジオン軍は地球への降下作業を開始し、わずかな期間に北米の軍事拠点キャリフォルニアを襲撃し、および各地の工業地帯、軍事據地のための鉱山などを次々と占領していった。

大量の戦力を投入し、防衛を固めたジオン軍に対して、密襲の基本で軍に備いつた連邦軍は、それ以上の侵襲を押しとどめるのがやっとの状況だった。

だがジオン軍にも、自軍としていた地域の制圧までは成功したものの、積極的には連邦軍に対して攻勢に出られるほどの戦力は持てなかったのがある。こうして戦局は停滞し、数ヶ月が経過した。

#### 地球連邦軍の反攻作戦

両軍がらみ合う膠着状態の間に、ジオン軍は援軍した輸物や工量プラントで生産した輸物車、宇宙へ上げること成功していた。

サイド3の保有していた輸物車は、軍戦当初に投入していたため、この作戦の成功は、各方面の戦線の維持におおいに役立ったと考えられている。

とはいへ、軍戦半ばに決着できなかった時点で、ジオン軍の戦線は決裂していたといえる（本来なら投下したコロニーは、軍戦本部のあるジャブローを襲ったものであり、降下作戦は連邦軍の戦況に決定的な影響は与えなかった）。物資は手に入れたものの戦況に対する軍に乏しく、たまたまささいな兵力や、地球の各地域の圧迫、戦線に割けられたいジオン軍は、密襲を立て直し全勢力を挙げて反攻に出た連邦軍の輸物作戦の前に、潰れていくことになった。

ユーラシア大陸中央部を占領し、希少輸物を運出す

一年戦争では、宇宙での戦い以上に、地上で戦いが展開された。それはどのような流れで、どのように決着を見たのか。その戦いの流れを追う。

鉱山地帯を手中にしたジオン軍勢力は、軍戦軍にとって最大の脅威であった。これを放棄すれば、ジオン軍が地球全土を制圧することは不可能としても、戦力が軍戦化することはおきないからである。

そこで連邦軍は、この地域のジオン軍の本拠地である軍戦近郊のオデッサを攻撃する作戦を立案した。U.C.0079年11月7日、中央アジアからヨーロッパのジオン軍の勢力を一個した「オデッサの戦い」である。

圧倒的兵力でオデッサ郊外に押し寄せた連邦軍は、ジオン軍は必死の抵抗を試みるも、数日間の交戦の後、この地を放棄し、撤退した。これは、ジオン軍の戦況の判断の軍である。軍戦近郊を死守するために、軍は兵力を投入し、軍戦し続けることの不利を覚悟したのかもしれない。

意外にも、この戦いにおけるMSの役割は、それほど大きくはなかった。軍戦において、ザクベールの軍戦は軍戦軍の持つ戦車や戦艦といった遠征戦力に対しては大きなアドバンテージを得ることにはなかならず、一部に投入された新型機も数があつた、大勢に影響を与えものではなかったからである。

この後、潰れつめられたジオン軍は11月30日、ホワイトベースを退却し、それまで明確な所在地が不明であった、地球連邦軍本部地下基地に攻撃を仕掛けることになる。

この戦いでジオン軍は大量の新型MS軍を投入し、南米マゾン川流域・ジャブローの、軍戦本部がある地下空間に侵入を遂げた。

キャリフォルニア・ベースの所有する戦艦の大半を投入したこの作戦だったが、所詮は敵の食害するつめていない状況での軍である、軍地に配軍されはじめていた連邦軍の生産型MS群の反響などもあり、失敗に終わる。

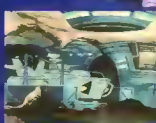
一部兵力がアフリカ戦線に残置し、軍戦にわたってゲリラ戦を戦ったものの、地上でのジオン軍の大規模な作戦行動は、この戦いが最後となった。ジオン軍は、残った戦艦を宇宙へと軍戦し、最終決戦への道を軍戦選択し残されていなかったのだ。

オデッサ作戦前、地球の連邦軍、この時点ではホワイトベースが連邦軍のMS部隊だった。



作戦は、大規模な戦力で複数の戦艦から連軍、敵戦力を包囲、撃破するというものだった。

ジャブロー上空に侵入するジオン軍の攻撃部隊。戦艦以来最大規模のMSが投入された。



ジャブロー内宇宙船ドック、この付近までMSを投入したが、ガンダムに軍戦された。



# RX-78-2 GUNDAM

## 闘いの記録

数々の激戦を闘い抜き、伝説となった白いMS、ガンダム。サイド7の混乱の中、あるいは灼熱の大気圏突入のさなか、中央アジアの荒野、そしてジャブローの地下空間で……その闘いの軌跡を追ってみる。

### BATTLE CHRONOLOGY

宇宙世紀  
0079年1月3日 一年戦争開始

- 1月4日 プリティッシュ作戦  
ジオン公国軍による  
コロニー落としの開始
- 4月1日 地球連邦軍、V作戦開始
- 8月 連邦軍、サイド7にて  
RXシリーズの  
最終テストを開始

- 9月18日 サイド7コロニー内にて  
初のMS戦士による実戦  
兵衛人アムロ・レイが乗るガンダム、  
ザクを撃破

ホワイトベース、ジオン軍の追撃を  
受けながら多くの避難民を救い、  
ルナツーに向かう

- 23日 ホワイトベース、  
地球のアラバダ山脈東麓付近に落下  
ガンダム、戦場中に単独での  
大気圏突入を行う

- 10月 連邦軍、MSの本格的な量産を開始

- 4日 ホワイトベース、  
ガルマ・ザビ指揮下の部隊と  
アメリカ大気圏西太平洋地域で交戦し、  
勝利する

- 6日 キレン・ザビ部隊、ガルマの部隊で試験を  
行う

ランバ・ラル部隊、ガルマの  
軍用艦の命を救い、  
ホワイトベースに送る

ホワイトベース、太平洋上空を通り、  
中央アジアからカスピ海をめざす途中、  
ジオン軍嵐山基地を攻撃

ホワイトベース、黒海沿岸にて  
マドルグ部隊による追撃を受けるも、  
嵐山基地の破壊に貢献する

- 11月7日 連邦軍、オデッサ作戦を開始

連邦軍、量産型MSジムを実戦配備

- 27日 ホワイトベース、大西洋上空を抜け、  
南米にある連邦軍本部ジャブローに  
到着

- 30日 ジオン軍、ジャブロー攻撃作戦を  
開始するも、失敗

アムロ、シャアと再び戦い始める

- 12月2日 ホワイトベース、最終戦として  
ジャブローから宇宙へ

### BATTLE DOCUMENT 01

#### RECORD

TIME: U.C.0079.9.18  
PLACE: サイド7 1バシタコロニー  
ENEMY: ジオン軍 MS ザク2機  
パイロットはデニム、ジョーン



## 大地に立つ!

ジオン軍のMSザクに蹂躞されるサイド7で、白い機体が立ち上がった。ザクのマシンガンを受け付けず、圧倒的パワーでねじ伏せる。その機体の名はガンダム。コロニーに座るのは、偶然にもその場に居合わせたアムロ少年だった。

蹂躞されるのは、今度はザクの方だった。その恐るべき性能の前に駆出を促ったザクは、ガンダムのビーム・サーベルによって胴体を切断されることになる。さらに驚かせるもう1機のザクを、コクピットを買い取って沈黙させ、サイド7の惨劇は、ひとまずの終わりを迎える。だがそれは、これから始まる闘いの序章にすぎなかった。



## MS同士の 史上初の実戦



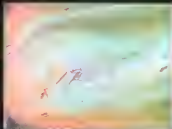
史上初の、鋼の巨人同士の闘い。ガンダムはすべてにおいてザクを圧倒した。

# BATTLE DOCUMENT 02

RECORD  
TIME: U.C.0079.9.23  
PLACE: 地球上空  
ENEMY: ザク4機  
パイロットはシャア、クラン/ほか



## 灼熱の攻防



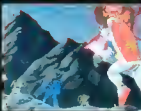
赤い彗星との邂逅、  
そして大気圏突入

大気圏突入を行うホワイトベースに、赤い彗星のシャア率いるザク部隊が襲いかかる。迎撃に出たガンダムは敵を深追ひし、地球の重力に接まり、落下しはじめる。突入時の高熱で燃焼するのを待つのみと思われたが、機体には大気圏突入機能が用意されていた。灼熱の地球を突破し、ガンダムが大空を舞う。

# BATTLE DOCUMENT 03

RECORD  
TIME: U.C.0079.10  
PLACE: 太平洋上空・カスド海  
ENEMY: グフ、ザクほか  
パイロットはランバ・ラルほか

百戦錬磨の武人、ランバ・ラルの操る新型MS「グフ」が、地球に降りたガンダムに迫る。ザクとは比べものにならないグフのパワーとスピードの前に、ガンダムは次第に追い詰められていく。いつしか、刺客同士の決闘のように対峙する2機のMS。一閃の光芒がきらめいた後、ガンダムのサーベルは、グフの腹を斬り飛ばしていた。



新型MSとの  
肉弾戦

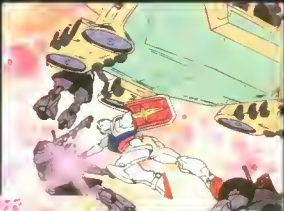


# BATTLE DOCUMENT 04

RECORD  
TIME: U.C.0079.11  
PLACE: 地球表面  
ENEMY: F.M.3機  
パイロットはガイア、マッシュ、オルタガ



3機のMSの仕掛ける夢幻自在の攻撃。詰め付機のように逃げ場を封じられながらも逆襲に転じるガンダム。



歴戦の  
古兵共の  
強襲……!



「オデッサ作戦に参加するホワイトベース隊。その前に、黒い三連星のふたつ名を持つ、3人のエース・パイロットたちが立ち上がる。彼らの電機は、脚部にハイパー機構を持ち、地上を滑るように高速移動する新型重MS、ドム。3機は連携フォーメーション攻撃、ジェット・ストリーム・アタックをガンダムにしかける。これは、縦一列の隊形を保ちながら高速で接近、時間差で敵機を攻撃するものだった。錯覚をさそうフォーメーションに苦戦するガンダムだったが、奇跡的な回避行動を取り、一気に逆襲に転じた。









## 武者頑駄無の仲間たち

SD戦国伝

武者七人衆編

SD戦国伝の設定が確立していく中で登場した、最初の物語が 武者七人衆編。た 機嫌となく敵が滅びていけられた天宮を舞台に、無敵を以て誇る勇者たちの活躍が描かれていく。平和と団結を語る頑駄無軍団の総大将・二代目頑駄無大將軍の号令の下、武者頑駄無、武者丸頑駄無、武者頑駄無摩屈、武者精太頑駄無、武者駄無留精太頑駄無、武者仁宇頑駄無、武者斎胡頑駄無の「武者七人衆」が集結する。一方、敵対する闇将軍率いる闇の軍団も、頑駄無軍団の司令部・頑駄無城へ総攻撃をかけた。激戦の末、敵の全てを裏から撃っていた、真の黒幕・闇将軍が出現する。これにより、頑駄無大將軍が一瞬討ちを逃れ勝利するが、自らもまたその命を救うることとなる。重い犠牲の上に戦いは終結し、ついに天宮に平和が訪れるのだった。



武者丸頑駄無

へと進出した。二代頑駄無軍団を再興した頑駄無の弟子・家は武者頑駄無の双子の弟。正体を隠し、闇将軍の影、う別称を名乗って、軍団の真に目撃秘宝を探るため行動していた。



武者頑駄無摩屈

元は隠れ里に住む狩人だったが、森で暗殺者に狙われた初代頑駄無を救った功績により、武者の称号をもらえ七人衆の一員となった。家は、初代大將軍と共に戦った摩駄無の子である。



武者精太頑駄無

旗印・影舞旗印から身を立てた、武神頑駄無の子といわれている。馬術と弓の名手で、豪馬・崎西遊太と合体してケンタウロスヘルム形態を取ることによって、高速移動が可能とする。



武者駄無留精太頑駄無

かつて初代大將軍と共に戦った、闇将軍の子。大いなる物を使えた戦法を得意としている。一方で機械工学の知識に長け、自らから武器や、仲間たちの兵器なども開発してしまう。



武者仁宇頑駄無

初代大將軍と共に戦った龍頑駄無の子。両親の死を悔やみ山で暮らしていた。伝説の龍神の教えを受け、「龍子」という神秘的武術を操る。守護獣である「千龍」と合体して、武者竜龍となる。



武者斎胡頑駄無

初代大將軍と共に戦った家頑駄無の子。山奥の隠れた村に暮らしていた。七人衆の一人名となつた。闇将軍によって失われた秘宝に号していたが、仲間の手助けにより復讐する。

# ガンダム狂四郎

メカデザイン&イラスト

やまと虹一

原案 クラフト田

## 作品ナンバー1 志士ガンダム

「おれのプラモ魂、齢四十にして変わらず！」プラモ製作技術もプラモ魂も頂点に達した2010年の京田四郎(39)が、新たなガンダムをつくりあげる！作品ナンバー1は、幕末に生きた「私たちの魂をこめた「志士ガンダム」その勇姿をとくと見よ！



### 志士ガンダム

作 京田四郎(39) フルスクラッチ

右手の中折れ式ビーム・リボルバー、そして臂中に装備した2門の「騎強砲」で敵を牽制。幕末の最新のファッションであった「ブーツ」を再現した足甲冑のバーニアで急接近する

ととめは、志士の左手を腕に撃ちつける「黒幕ゴットフィンガー」だ

兜の赤い髪は「獅子」のたてかみをかたどったもので、この機体の名前の「志士」は「獅子」の力をも象徴しているぞ！

「背後のドム3機は「黒い新撰組」と呼ばれているぜ！」



2010年の  
京田四郎(39)

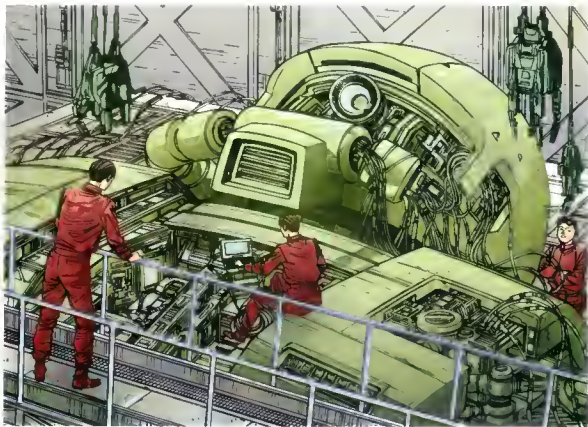
特別出演  
1980年の  
京田四郎(9)

おれのプラモ魂が  
ガンダムを幕末の  
志士に変えた！









「……道徳」……人の心の開発  
 随は、初めて M さんの身体  
 と触れることまで  
 兵士計画では軍用機としての  
 タも完成、MMS の、とりわけ  
 も計画の「理」が加えられた「理」  
 し、タが道徳、人々の心を、開  
 発された、とは想像し、難い  
 また、随は、その構造を分析し、  
 研究用の機体を作成しようとも、われる  
 この機体は RRF-06 サードと呼ばれるも  
 ので、軍に可能な最新型の 120mm 低  
 圧軌条、一組と、鋼造のランカ、砲を  
 搭載して、備えたいという  
 兵士計画末期には、その、研究  
 成果、で、RXM-1 の型番を、持つ  
 ティトタイプロケットが完成して、る  
 か、RRF-06 はこの機体とは別のものと  
 見られて、る。RXM-1 は主に、ランサ  
 のミストに用いられ、テラは、その作戦  
 計画、RX-77 の開発に反映された

は、主戦場の移動型 MMS の計画、は、機  
 体、にすぎなかった

RX 計画は複数のプロジェクトの間隔道を行き、  
 戦術的観点から、この、計画は兵器が開発される  
 方、で、MMS のその、開発も進められていた  
 人、な、大型、の、有、を、兵器、にする、に、  
 従、軍、兵器、は、その、開発、を、技術、に変、えて、この、  
 プロジェクトは多くの基礎研究によって構成される  
 ものとな、この、ため、車、内、部、や、車、体、商、業、の、み、な、ら、ず、  
 計画、は、民間、の、研、究、員、や、技、術、者、た、ち、が、参、画、進、行、の、MMS 開発は官民、の、協、同、研、究、体、の、形、を、と、  
 た、と、え、ば、人、型、の、形、状、に、は、兵、隊、の、制、服、者、た、ち、  
 が、た、り、人、型、な、か、ら、の、機、き、の、内、装、は、ソ、フ、ト、ウ、  
 ェ、ア、メ、リ、カ、に、よ、り、研、究、さ、れ、た、<sup>34</sup>

車、内、部、の、シ、ョ、ウ、ア、ン、ビ、エ、ン、サ、ー、の、研、究、は、人、間、間、  
 の、義、理、と、異、な、リ、シ、ョ、ウ、の、機、体、を、人、き、と、する、こ、と、が、  
 可能、で、あ、た、め、に、比、較、的、容、易、で、あ、る、た、い、う、  
 関節の運動方式として採用されたのは、関節部、に、  
 動力ユニットを装備するモーター方式である、この  
 方式は重量や出力に上して、設置体積が小さいとい  
 う問題点があったが、連邦軍技術部は従来の電動  
 モーターより軽量、高出力なユニット、フィールド  
 ー、マ、を、車、内、機、に、装、備、し、タ、カ、ン、サ、ム、と、モ、  
 ー、ブ、を、用、意、研、究、で、可、成、した、フィールド、モ、  
 ー、は、フィールド、と、エ、ネ、ル、ギ、ア、一、種、の、相、対、作、用、  
 を、利、用、し、た、高、速、伝、送、型、の、大、型、テ、レ、ビ、シ、ョ、ウ、  
 であり、高い動力を創出していた

開発陣は、これを主駆動部をはじめとする主要な関  
 節に設置、フィールドの各部節にも原理的に

同様の機構を装備した、は、車、内、部、に、配、さ、れ、  
 た、リ、ン、ク、は、ト、ラ、ン、ク、を、使、用、し、た、リ、ン、ク、  
 モ、ー、タ、を、用、意、に、成、した、プレート、が、サ、イ、ト、する、構、  
 造、を、行、う、駆、動、部、で、あ、る、IBO-D-A 技、術、研、究、  
 所、が、用、意、に、製、造、さ、れ、て、い、る、

ガンダムに採用されることになるサム・ソニア、  
 モーターは、リニア駆動型モーターは SS SM109、  
 125 と、い、う、特、点、に、あ、る、こ、の、名、前、か、ら、明、に、サ、ム、  
 ソ、ニ、ア、モ、ー、タ、と、呼、ば、れ、る、後、に、こ、れ、ら、モ、  
 ターは、連邦軍 MMS の標準品として採用され、社名  
 そのものもサム・ソニアを名乗ることとなった  
 また、20 メートル近い、人、な、機、体、を、支、え、  
 して機能させるための構造材、装填の素材研究も  
 行われた

結果、生み出された新素材、ランカ・チタウム合  
 金は軽便で耐摩、耐熱、耐燃にも優れていた、ランカ  
 ・チタウム合金は、これは MMS のための理想的な素  
 材であり、改良を加えたものが、一年戦争以降も、  
 MMS の装甲材料として採用されていくことになる  
 人型、の、人、な、機、体、を、機、動、さ、せ、る、動、力、と、  
 しては、小型、の、高、出、力、の、熱、機、と、見、合、わ、ね、ば、な、  
 ら、な、い、こ、の、目、的、に、あ、る、タ、カ、ン、サ、ム、の、研、究、  
 陣、は、こ、れ、に、対、し、て、連、邦、軍、タ、カ、ン、サ、ム、発、動、機、が、研、究、  
 開発を行った

タカム発動機はもともと、前部、中、部、輪、軸、機、  
 の、エ、ネ、ル、の、メ、カ、ニ、ズ、で、あ、る、が、熱、機、と、見、合、  
 合、も、照、射、し、て、認、識、し、て、い、る、こ、の、機、体、に、影、響、  
 することになった、も、と、も、開、発、は、機、動、機、に、  
 適用型の、超、中、等、熱、機、と、見、合、わ、れ、た、目、的、に、あ、る、  
 た、た、し、に、装、品、は、リ、ン、ク、ウ、ル、ス、に、行、わ、れ、て、い、る、<sup>35</sup>

また、タカム発動機は熱機と見られ、以外にもヒーム  
 発振器やアクチュエーター関連の研究開発も行っ  
 ている、タカム発動機は一年戦争終結後も MMS の設  
 計、研、究、を、受、け、し、る、か、ら、内、装、品、部、に、心、を、な、  
 した

MSS に必要な各要素を研究、開発することで、R  
 X 計画は数々の成果を挙げた、軍需産業以外の民  
 間企業をも多数、参画させたことで、両陣営の新素  
 材や設計製造も数多く開発されていった、民品を  
 扱、て、さ、る、技、術、者、た、ち、は、従、来、の、軍、事、技、術、の、発、想、  
 に、拘、り、し、る、こ、の、こ、ろ、が、ア、ラ、ス、に、働、き、だ、い、た、<sup>37</sup>

しかも、一年戦争開戦後、連邦軍がサウの南境  
 に、成、立、し、た、こ、の、こ、ろ、で、推、測、す、る、は、な、か、な、か、た、  
 MMS の機、体、が、明、ら、か、に、な、っ、た、

内部構造の解析は、難航していたタカム発動機  
 の、小、型、熱、機、と、見、合、わ、れ、た、研、究、を、<sup>36</sup>に、進、め、る、こ、に、な、  
 った、結果、完成した MMS 用超小型熱機と見られる  
 ま、で、の、技、術、的、素、材、も、あ、る、て、初、期、の、研、究、陣、か、ら、見、  
 る、と、同、機、の、も、の、を、造、く、高、い、性、能、を、持、た、

も、と、も、数、々、の、成、果、を、出、し、な、ら、な、い、MMS と、い、  
 う、新、機、器、の、在、り、方、を、示、し、て、認、識、し、て、い、ない、連、邦、軍、  
 機、体、は、戦、術、機、体、の、面、面、に、お、い、て、計、画、の、指、針、を、持、  
 た、な、か、た、R X 計画で完成したのは、大抵には他  
 えぬ研究用の試作機と、設計された RIX 44 MS  
 とい、い、る、機、体、RX 75 や RX 76 の程度にすぎなかつた

しかも、RX 計画の各プロジェクトに横の繋がり  
 は、薄、か、た、と、え、ば、RX 75 に他のプロジェクト  
 の、技、術、的、成、果、が、お、お、と、と、反、映、さ、れ、て、い、る、た、

各プロジェクトから提出された無数の素案を統合  
 する、指、針、に、お、い、て、そ、れ、を、与、え、た、の、が、自、身、の、機、体、





RX 78-1 完成した。この、信賴試験の緩和を要する陸軍省の管轄上 RX 78-1 計画が始まった。5月10日の勢力拡大の懸念される東南アジア方面などから、MSの早期配備を求める声が強かったのである。陸軍省はこうした要請に応え、RX 78-1、すでに設計の進行していた量産機の RGM 79-1 を、陸機として少数ながら先行量産させ、機体投入しようとした。

RX 78試験機といえながらも、本質的にはガンプラ・タム・テムに近い、高品質な機体であった。そのため、品質管理は厳しく、大量の空判（バツ）がかりしこととなった。そこで、空判のバツを利用し「ガンダム」をばっししてしまおうと考えたのだ。たまたま、空判のバツを利用したこともあって、各機種の性能は一定しておらず、ミラージュを設けることで性能差を縮めていた。このため、RX 78のバツを全面利用したにもかかわらず、性能そのものは1つ低めになったのだと考えられている。一説には、空判バツを利用してはいても、RX 78の腕関節部分ではすでに完成したものといわれる。RCM 79(II)に比べても同様に、品質検査が厳格に行われた結果と見る向きもある。

も、とも、車1両組はRX78の複雑な生産工程やコストから当初採用に難色を示した。試験機機体ということで、主戦機用の機体を取り置き、テストの削減のためコア・ブロック・システムを廃するなど、細かな仕様変更が前提とされていたにもかかわらず、十分とは見なされなかった。開発陣は再度設計を変更し、ようやくRX79の機体を確認できたという。

完成した機体は9月下旬より順次、東南アジア方面をはしめとする、公国軍勢力の拡大が懸念される地域へ配備されていた。

「1台数は1数機とも、1数機ともいえず、1数機は不明である。交換部品の不足から配備先では多数のカスタム、メイト機が1台まわっており、このことが大

人数したRX79GLの頭部をRCM79GL陸戦型  
ムのものに変更するといった修理交換レベルでは  
なく、機体そのものの外観から見てRX79GLと

はなも　　ふ　　あ　　あ　　あ

RCM 77 組と RX 79 組の相関は、 $r = 0.91$ と相性が高い。これは RCM 77 組から RX 77 組のデータを用いた「両変数を用いたためである。RCM 77 組は RX 77 組の機体数の絶対的な不足を補うこと、RCM 77 のデータ不足を補って試験開始に「両変数を用いたためである。そのため RCM 77 組は RX 78 同様、炭素材、ホウ素、シリコン、合金を使用するなと一度に両変数される RCM 79 よりも相関性を有している。このため RCM 79 との「両変数性は極めて低い。ただし RCM 79 組の「両変数は低い。選別組は RX 79 組の RCM 77 組の試験結果を受け、RCM 79 はより「両変数でない「両変数となる。RCM 79 組を変化したところ、

## ガンダムという神話

当日「カンパニーの開発史をふりかへ、これにより我々は  
ははははカンパニーは機械屋の四半番だ。何ぞ機械  
何ぞ機械といった町場には流石を乞ふる」といふは「  
」屋機の情報だけでなく、神の力のかけがえなしで

上野のところで、年戦争時の「カンタム」は、  
曲の別のものも含め約1冊、10種を超えてしま  
い、さらに「戦後にな、ごんたが有るを要するよう  
になった開化曲や、戦場でのノックアウトした  
ものまで含めれば、由子に余る数の「カンタム」、か  
つては「宮城島」「成吉思汗」の間に、「曲」あるに  
よって、三曲四、五曲と増えていく。

こうした混乱が引き起こされた背景には、RX 79計画大衆を後押しした情報統制の緩和があったという見方もある。RX 79版(4)型式番号に、RXを冠しているように、各地の官報拠り、各担当部署が独自判断でRX 78の設計を仕様変更し、機体を開発可能となった、といったところなのである。

た。こうして各方面で開発された機体は日独を独自変更していたこともあり、バー・1の互換性は極めて低いものとなっていた。基本設計を同じにしても、規格が違ふという機体の存在は堅固性に多くの問題を発生させた。

この小説はMと関係にある連邦軍の私成敗な部

$$v_A, \quad \Gamma, \quad v_2, \quad \Gamma$$

とはい、この時期の「連立」は、武蔵  
機とあり、主戦機へを面取りする一方、方角  
と方位は、一機一機に面取りするRA 797Gの  
配備に表されるように、Mの兵器体制が確立さ  
せている点で、武蔵機とあり、とも面取り、あ  
るも機「の」の視座としていたことは、一際、  
戦力として利用することを認めた背景には、おそ  
ろそろこの戦い以後、よりいっ、て  
運用された、口、口、口の戦果があったもの  
なり

「このレーシヨの重要とした符号機は、ホワイトヘッド」  
 とともに地味降下し、各地を氷敷、再び上り  
 した。これは「レーシヨ」段階時に参加した。この  
 段階でこの符号機は「タイプ」として解した。こ  
 のレーシヨの速度に反応できなくなっており、  
 「タイプ」古語後、技術者、研究者「タイプ」博士の  
 指揮のもと、タイプ「タイプ」コーエンク処理を施さ  
 れた。

年戦役の史上最大の戦いとなった「バロ  
ン・ウー」攻防戦によって、アン・ロ・レは「オ  
リス」レーサーとして知られるようになった。MSN02  
シリーズに重視の部品を破壊されたからか、これを  
言い訳に、親名となった。その後、アン・ロ・レ  
は「バロン・ウー」内で闘争した。号機より平時  
語が「A」で呼称される。全部調子直し、コ  
パイロットとして搭乗させていたエド・マイターで  
脱出しようとした。

ゲーム・レイのこの機によるMVS撃破数は200機でもいまでは、正確な数字は明らかとなっていない。しかし、彼が連邦軍を代表するエースパイロットであることは間違いない。ゲーム・タイプ2にあたり、この事実を首肯し引いても、三代平はの少年にこれほどの戦果を挙げさせた「カンタム」という機体は、連邦軍内で絶大な評価を得ることになった。

カンタマの頭部より外れた。しかし、その顔  
はある種の神話となって、戦後へと引き継がれて  
いくのだ。

\*09 RX 78の4号機以降の機体は7号機まで開発されたとも、8号機までであったともいわれ

後者の図によれば「れらは初期試作型  
呼ばれ、RX 78-1と同型の 中国武器型  
RX 78-2と同型の「後期試作型」に分けらる  
との機体番号のものかとの形状を有してい  
たか不明であるか、いずれも大気圏突入機能と  
種々の用途ユニットを備えていなかったと  
これは、ジャブローで製作され、4号機、5  
号機とされるものか、WJ給油車型機、サ  
ラ・プレートに配備され、第一号作戦に、参加し  
たとされる、6号機から8号機までの機体、い  
ては情報が存在しない」

も、権限の機体情報が存在する。ここではその一例を挙げるに留めたし。『右巻』

「H.A.」を基に、開発された戦艦を、宇宙での反攻作戦

A photograph of a group of people in traditional Japanese festival attire, including red and white headgear and costumes, performing a dance or ritual.

● 4 月 4 日 櫻井・山根

ム・イ機で肉られ  
ソをフ ト・ウマヤ

増設装甲の装備を前提！  
 装甲の増設を機軸とする。



# GUNPLA-ガンプラ30年の歩み Revelations



## ガンプラ誕生から HGシリーズへの進化

ガンプラ生誕30年の進化の歴史を振り返る連載企画 第1回は、現在のガンプラシリーズのベースを築きあげた、ガンプラ誕生から10周年までの技術的進化の流れを  
文：石井誠

### 進化の基礎となった設定再現へのこだわり

ガンダムシリーズの1号機として、通称ガンダムの項1弾として発売されたのは、1980年7月24日（テレビアニメ『機動戦艦ガンダム』の放送が終了した80年1月26日からほぼ1年ぶり）リリースされた「1/144スケールガンダム」がそれだ。以降30年を経て現在まで存るガンダムの歴史は、ここから始まった。

「1/144スケールのガンダムが、当時のファンから大きく支持されたポイントとして、当時の流行を廃止し、アニメの設定に忠実なフィルム」各部の関節可動を再現したことが挙げられる。劇中同様の関節可動に重きを置いたガンダム開発姿勢は、その後のガンダムの進化の軸となっていた。商品化第1弾のガンダムでは、顔可動のみで構成されていた関節パーツは、その後、股関節パーツに横軸可動が加えられたことにより、機部のスイング機構やホールジョイントが採用されるなど、関節構造に関するアプローチは、わずか1年の間に大きく進化していった。



### 1/144スケール ガンダム

この第1号機は、白と赤の2色で構成された「1号機」の再現。当時の流行を廃止し、アニメの設定に忠実なフィルム」各部の関節可動を再現したことが挙げられる。商品化第1弾のガンダムでは、顔可動のみで構成されていた関節パーツは、その後、股関節パーツに横軸可動が加えられたことにより、機部のスイング機構やホールジョイントが採用されるなど、関節構造に関するアプローチは、わずか1年の間に大きく進化していった。

当初、ガンダムは、アニメのみのオリジナル機として、新しい新たなステップに到達する。劇場版『機動戦艦ガンダム』の公開後も、雑誌展開などを積極的に盛り込みながら続いていたガンダムは、戦記的な解釈を取り入れた、劇中に登場しない機体「ハイパーガンダム」が、さらにガンダムの人気を押し上げた。8月8日からリリースする。MSVでは、より大規模な解釈のハイパーガンダム展開を計画し、旧シリーズでトビ化した機体を、同じくした技術を用いてリメイクした。その結果、A部の前後スイングによる武器保持時のホーミング軸が、かなり、足部の接地性も向上。さらに、後部の商品ではホーミングも導入すること。ガンダムは、80年からの行進が、機体の可動性やモデルの、ひとつの到達点をこえて迎える。

### 作りやすく精巧なガンプラの新たなステップ

83年には待望のアニメ補完「機動戦艦ガンダム」が、放送を開始。ガンダムの、ガンダムは、それまでの技術がファーストバックされたのはもちろん、ホーミングが標準装備となり、さらにパーツ分割による色分けも進められた。ユーザー層拡大のために新展開された「1/220スケールでは、従来のスイング機構も導入されることで、さらなる進化のステップとして、組み立てやすく、精巧なガンプラ」というコンセプトの基礎がこの時期に固まりつつあった。

### MSVシリーズ

劇中には登場しなかった機体のハイパーガンダム。MSV（Mobile Suit Variants）シリーズは、ガンダムの世界観を再現し、アニメの設定に忠実なフィルム」各部の関節可動を再現したことが挙げられる。商品化第1弾のガンダムでは、顔可動のみで構成されていた関節パーツは、その後、股関節パーツに横軸可動が加えられたことにより、機部のスイング機構やホールジョイントが採用されるなど、関節構造に関するアプローチは、わずか1年の間に大きく進化していった。



この進化の流れを、87年にリリースされた「1/144スケールガンダム」のリリースには、色成形成による色分け、スイング機構、トビの技術を用いた1/144スケールに見出し、現在にいたるガンダムの基礎を築き上げた。この進化の流れを、87年にリリースされた「1/144スケールガンダム」のリリースには、色成形成による色分け、スイング機構、トビの技術を用いた1/144スケールに見出し、現在にいたるガンダムの基礎を築き上げた。

そして、ガンダムは、次のステップでさらなる大きな進化の時を迎えることになる（次巻に続く）。

### 1/100スケール

### Zガンダム

MSVシリーズのZガンダム。このZガンダムは、ガンダムの世界観を再現し、アニメの設定に忠実なフィルム」各部の関節可動を再現したことが挙げられる。商品化第1弾のガンダムでは、顔可動のみで構成されていた関節パーツは、その後、股関節パーツに横軸可動が加えられたことにより、機部のスイング機構やホールジョイントが採用されるなど、関節構造に関するアプローチは、わずか1年の間に大きく進化していった。



### 1/144スケール

### HGシリーズ

この1/144スケールHGシリーズは、ガンダムの世界観を再現し、アニメの設定に忠実なフィルム」各部の関節可動を再現したことが挙げられる。商品化第1弾のガンダムでは、顔可動のみで構成されていた関節パーツは、その後、股関節パーツに横軸可動が加えられたことにより、機部のスイング機構やホールジョイントが採用されるなど、関節構造に関するアプローチは、わずか1年の間に大きく進化していった。



# GUNDAM MS HISTORICA

全6巻予定 各巻定価 690円(税込) A4判変型  
角背 中とし オールカラー 36ページ



特集

## 次号 Vol.2 Gを継ぐもの 6月24日発売 —ガンダム直系機

マグネットコーティングを施された新生ガンダムの、伝説のラストシューティングまでと、ガンダムの遺伝子を継ぐ直系機群を、徹底的に紹介!  
紹介機種 ▶ RX-78-2 ガンダム RX-178 ガンダム Mk-II RX-79[G] 陸戦型ガンダム RX-79[G] Ex-8 ガンダム Ex-8

専用バイダー付き Vol.4  
予約受付中!



価格2400円(税込)  
送料込みの初めり  
6月30日(水)

★実際に手に入れるために、お近くの書店にて予約ください。  
★専用バイダーは、Vol.4とセットのみの予約販売となります。

ハールの光沢を放つ  
高級感溢れるバイダー!  
本誌全6冊を収納可能

刊行予定

Vol.3 7月24日発売予定

高みへの飛翔  
—飛行型ガンダム

紹介機種  
MSZ-008 Zガンダム  
LM314V21 V2ガンダム



Vol.4 8月24日発売予定

驚異の鬼神  
—ニュータイプ専用ガンダム

紹介機種  
RX-93 Vガンダム  
RX-78NT-1 アレックス  
MRX-008 サイコ・ガンダム  
MRX-010 サイコ・ガンダム Mk-II



Vol.5 9月24日発売予定

宇宙を震わせる  
脅威—重量級ガンダム

紹介機種  
MSZ-010 Zガンダム  
RX-78GP01 ガンダム試作1号機  
RX-78GP02A ガンダム試作2号機  
RX-78GP03 ガンダム試作3号機



Vol.6 10月23日発売予定

Gを超え、  
先へと進むもの  
—進化系ガンダム

紹介機種  
RX-0 ニコニコガンダム  
F91 ガンダム F91  
LM312V04 Vガンダム



の伝説 RX 78-2 特集  
伝説の始まり  
RX計画とV作戦  
The Architecture of GUNDAM ガンダムの設計思想  
コア・ブロック・システム  
Weapons of GUNDAM  
アーマー コア・ブースター  
ガンダムの制系統たち ガンキャノン ガンタンク  
ガンダムのサポート・メカ ガンバレー  
RX 78-2 GUNDAM 副機と32機

GUNDAM SIDESTREAM ガンダム・サイドストリーム

第1回 SDガンダム・誕生編

ガンダム特刊部 やまと虹

自伝サンハート 志1ガンダム

ガンダムの世紀 河内有樹

第1回 そのとき、ガンダムの時代

GUNPLA Revelations ~ガンプラ 30年の歩み~

第14 ガンプラ減1からHGシリーズへの進化

GUNPLA FRONT LINE 30th

川口名人のたとえとガンダム 川口克己

第1回 模型趣味にふさわし

Editor 山崎 伸一  
Editor 山崎 伸一  
Writer 山崎 伸一  
Editor 山崎 伸一  
Design 山崎 伸一  
Special Thanks 山崎 伸一

最新情報はガンダムオフィシャルズ公式 Web まで  
<http://www.gundamofficials.com/>

Official File Magazine  
ガンダム MS ヒストリカ Vol.1

全6巻予定 第1巻

発行 人竹永介  
編集人 高山洋  
発行所 株式会社 講談社  
〒112-8001 東京都文京区  
電話 出版部 03-5395-3491  
34 コミュニケーション部 03-5395-3608  
33 営業部 03-5395-3603

製版 株式会社 集企画  
印刷 株式会社 集企画  
発行者 本村製本株式会社

Printed in Japan SBC 1.25 3ip 6mm  
全6巻16巻にわたる

全6巻 全6巻 全6巻 全6巻 全6巻 全6巻  
全6巻 全6巻 全6巻 全6巻 全6巻 全6巻  
全6巻 全6巻 全6巻 全6巻 全6巻 全6巻  
全6巻 全6巻 全6巻 全6巻 全6巻 全6巻

ISBN978-4-06-370078-7



